

白菊奇談と石點頭

中村, 幸彦

<https://doi.org/10.15017/12243>

出版情報 : 語文研究. 23, pp.1-5, 1967-02-28. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

白菊奇談と石點頭

中 村 幸 彦

取上げる白菊奇談とは、竹岡正夫氏編の富士谷成章全集下に紹介翻刻された、成章作と思われる小説集である。ただしそれには、予定九話の中、第一帖「中宮の小大進軍衣を縫て夫を定むる話」一つのみを収める。ここで白菊奇談としたのも、その一話のみについてである。内容に関するこの小論では又、この書の書誌的な解説は、悉く竹岡氏のその書を見ることを希望して、先づ梗概から入ろう。

人王七十代後冷泉天皇は、文学風流を解した名君主であつたが、内寵盛んで、佳麗が宮廷に多かつた。ある年十月中旬、一夜にして新雪があつて、中宮二条院で雪見の宴を催した。和歌を奉つたうち、中宮の「九重につもれる雪の高ければ越の白嶺を思ひこそやれ」の名歌に、かえつて竜顔を曇らせた。関白頼通の問いに、「万民の寒苦がしのばれ、殊に陸奥遠征既に十一年の、源頼義旗下の二万五千の軍士は霜に眠り雪に臥す。官庫の資材を以つて、宮女に戦襖を縫わせ、工女の姓名をしろして、送るべしと命じた。中宮の今参の女房小大進は、木工頭の娘ながら継母に憎まれ、漸く乳母子の叔母の縁で宮

仕えに出で、我身の不幸をかこつてゐる。戦襖を縫ううちの転寝に、中宮の前に琵琶を弾くべく召されて、見知らぬ男につけられた文を君前で落す。よつて階の下の大きな柏木に縛られる夢を見る。この夢の後、自らの境遇や、その襖を受ける軍士のことなど想像されてゆかしく、「みちのくの奥さへゆかし我ぬへる忍ぶの衣きん人やたれ」とかこたれ、彩箋にこの和歌を認め、五節に準備したかざしの玉と共に、綿の中に入れて仕上げる。三位紀氏廉、監送官として陸奥に下り、襖を分つた時、出羽の軍士齋田永勝がもつたものは、着るに、肩に痛味を感じた。針かとしらべるに何も無い。十四五人の同僚は皆同じで、京の軍士藤井良村にのみ、その事なく、甚だ身体に合う。永勝の申出で、証人を立て、合事酒を汲み交して、その襖を交換した。良村は御堂殿の家司の家柄からおちぶれたが二十五才の美丈夫。下戸の彼は少しの酒に酔い、睡からさめて肩の辺に痛味を覚えた。紫の賤の折れた先を認め、襖を開いて玉と和歌を得る。その風流をよみし、今の自分は「一死酬国の身、来世の縁ともなれよかしと思つたりする。

兎も角、宮廷での出来事、主帥頼義に報告すべきか、この女性性の為に知らせずにおくか、思案最中に、同僚伴棟貫に、事情を聞かれ、他言を禁じて話した。が、陣中に噂が高まり、永勝がとりかえしに来る。二人の争となり頼義に訴え出る。勅使はまだ滞留中で、宮廷の事、ともかくも奏問すべきである。と、箋と玉を携え、襖はかえして着せしめる。風流の天皇は、これをよるこび、小大進に事情を正した後、この希世の奇縁を成就せしめようと思う。宣旨を下して良村を召換される。中宮また小大進に婚禮の品を下賜する。十二月下旬、宣旨の使、鎮守府に到着。あたかもよし、十七日、官軍厨川の柵を攻撃して、良村は賊渠貞任の首を得て、陸奥平和に至った。康平六年二月、頼義の軍勢は凱旋した。良村は兵衛尉に昇り、氏廉の媒介によって、小大進とめあわせ、木工頭の家で礼をなさしめる。俊偉の青年、嬌容の少女、誠に良縁であった。小大進が、歌牋を天聴に達した一点をうらむに、良村、陸奥での、事情を語って、天定の縁分人意の測るべからざるものあるを知る。柏木に縛られた夢も亦、衛門府の將に嫁すの兆であったことをさとする。中宮より歌牋と鬘珠を返し、今ぞ見る君が世にあふ浦浪に玉も還てすめるためしを、小大進のかえし、「白玉も君が恵を光にてあふてふ浦に還るうれしさ」。良村、後に大國の守となり子孫繁昌、木工頭の当腹の女子も、良村夫婦の庇護で、幸を得た。

この梗概では細叙しなかったが、後冷泉院の宮廷の様子には、登場人物に、頼通を初め、左大弁宰相経家、藤原師実、女性では、中宮の二条院から四条の宮まで、栄花物語の「根あはせ」

の巻に出る人々が多く、「根あはせ」の巻には又、この物語に見える歌合のことや、雪見のことも見えている。その栄花物語の一卷を舞台背景に選んで、それに同時代の前九年の役をからませたものがこの一篇であった。また主要人物小大進の境遇をのべて、実母に早く死別し、継母にくまれて、一時は出雲寺の法師の色好めるに盗ませて、恥を与えんとしたとか、この女性が裁縫が巧みであるとか、最後の、継母の子供達も、夫婦によって、幸福な生活を送れたとかは、言うまでもなく落窪物語の姫君の境遇環境から得て来たものである。後冷泉帝の好学を述べては、新撰朗詠集に見える。「忽看鳥瑟三影……」の詩句を引き、事件転回の鍵となる中宮の詠草も後撰集卷八の「年深くふりつむ雪を見る時ぞ越のしらねにすむ心地する」を下に踏む如くであるなど、日本古典から、様々に拉し来った所が目につくが、それらについては細叙しない。

かえって、成章の友人上田秋成の雨月物語を想起せしめるこの和漢混清の文章には、これも雨月同様に、かなり生々しく漢語が用いてある。雪の降ることを「六花飄動」、炭火によることを「金鑪獸炭に倚り」、縫い方のよいことを「針線すぐれて精細」、下戸のことが、「酒量不濟」、事情を話すことを、「就裏稟明す」、その外にも合事酒・監送官など、白話と思われるものも、ままた見えて、秋成同様に、中国白話小説によるをうたがわしめるに十分である。出扱は簡単にわかって、白話短篇小説集天然痴叟著、墨懸主人評の石点頭の第十三話「唐玄宗恩賜絃衣縁」であった。この第十三話は、玄宗が楊貴妃と雪見の会に、黄番綽の一詩に、辺塞の軍士の苦を思い、潼関を守る歌舒翰三

千の軍士に戦袍が送られる。宮女の中、専吹象管的桃夫人が、小大進にあたって、裁縫の中の一夢で、玄宗にめされた所、楊貴妃に見つかり、白練でしめられんとしたことあって、以下、監送の役は陳元礼、永勝は王好勇、良村は李光普、棟貫に相当する人も、名を示さぬが、やはり介在して、桃夫人の袍に入れた詩箋と金釵は都へ持帰られる。玄宗は、宮女のこの不始末を大いに怒って、自尽させんと考えたが、楊貴妃の同情ととりなしによって、干祐韓氏の故事にならって、二人の縁をまつとうさせることにする。不想も、歌舒翰の飛報あって、李光普賊首を切るのこをつげる。二人の婚姻、事情の話合い、立身など皆、白菊奇談は、とり用いているし、文章が殆ど和訳の所も多く、前出の漢語も悉く、等しい位置で使用してある。一二例をかかげる。

○漢土の宮人韓氏か紅葉に題せる詩、御溝に流れたるを、干祐これを得たるを以て、朝廷より妻として賜はりたる故事と一雙にて、

○妾聞先朝曾有宮人韓氏、題詩紅葉、流出御溝、為文人干祐所得、后来事聞朝廷、即以韓氏賜祐為妻、陛下何不仿此故事。

○又思へらく、かくて独間思するも益なし。我、此心を其人に知らしめは、後世の姻縁ともならんかしと思ふまゝに

○想道、我今間思間悶、總是徒然、不若題詩一首、藏于衣内、使那人見之、与他結个后世姻縁、有何不可

以上、白菊奇談は、この石点頭の一話によつたとする十分の証であらう。

石点頭の我が国への渡来の初めはしらないが、尾崎雅嘉写の

舶来書目によれば、「宝曆甲戌(四)年九番船持渡小説三十部之扣」の中に、金陵葉敬池梓のものが見えている。そして成章の晩年には、上方で、これを翻訳、翻案した作品も出版されていた。来義庵南峰の人間一生三世相(安永三)、同人の唐土真話(安永三)には、石点頭の第二話「盧夢仙江上尋妻」第一話「郭挺之榜前認子」の意訳があり、大雅舎其鳳の太平記秘説(天明二)は第九話「玉簫女再世玉環縁」の翻案、三宅嘯山の宿直文(天明五)にも、第十二話「侯官県烈女殲讐」の意訳があるなどは、既に述べたことがある(拙著近世小説史の研究「読本發生に関する諸問題」)。上方の中国小説愛好者の間には、かなり興味をもたれた本であつたと言つてよい。この白菊奇談の筆者であり、竹岡氏によつて、著者とみなされる成章は、実に中国小説愛好者の一人であつた。彼の兄皆川淇園の寛政九年六月二十一日になつた「書通俗平妖伝首」(淇園文集巻之六)の一文をその証として、かかげておく。

余与弟章、幼時嘗聞、家大人説水滸伝第一回、魔君出困将生世之事、而心願統聞其後事、而家大人無暇及之、余兄弟因請其書、枕籍以読之、經一年後、粗得通曉其大略、及十八九歲得一百回水滸読之、友人清君錦亦酷好之、每会互举其文奇者、以為談資、後又遂与君錦競共読他演奇小説、如西遊西洋金瓶封神女仙禪真等諸書、無不遍読、而皆謂其制構有所窮、而不耐久觀也、最後得平妖伝読之、其奇百出可以与水滸腐行矣、与君錦弟章玩読不已、此距今四十余年前事也(下略)

と。四十余年前とは、宝曆の中頃にあたる。清君錦こと清田儂叟が、貫華堂本水滸伝を評したのも、その頃宝曆八年であつた。

成章は青年期からの白話小説好きであった。儂叟に照世盃（明和二）の訓訳あり、一方、上田秋成が長く雨月物語をあたためていることも知っていたであろう。中井履軒の如きにも、韓氏紅葉の故事を、日本化した雅文「しがらみ」があった。白菊奇談も、成章の作と考えるに、十分の彼の環境であった。

成章らは、しかし小説を読捨てにしていたのではない。淇園の文章にもある如く、文章を評し、構成を論じたのである。儂叟の水滸伝評や、中世二伝奇（安永二）の評にも見える如き、批評規準をも確乎として持っていた。このことは又成章、淇園兄弟も同じであったろう。よって、この白菊奇談でも、ただに石点頭の筋を、平安朝に引移したのではなくて、彼の小説観を通して、この翻案が試みられたと見るべきである。石点頭と奇談、この二話の間にきわめていちじるしい差を一二指摘して見よう。桃夫人は後宮の一員であって、夢中でも、玄宗にめされるし、そのことを、夫人も「不想今日却有恁般僥倖也」と思う。一件が明らかに後、玄宗は「朕宮中焉有此事」と怒っている。石点頭のこの一話は、それを批判したのもと思われぬから後宮の制度を認めるとすれば、桃夫人の行動は、宮怨の痴情であり、玄宗が怒るような一種の不義である。道徳的に弛緩した社会や、後宮制度に習れた中国では、或は何も気にすることでなかつたかも知れない。しかし成章は、これを日本の平安朝に移すについては、小大進の行動と境遇を、道徳的に批難されないように、きびしく留意して叙している。小大進は天子にめされるような身分でもない。親にもかえりみられない不幸な運命の下にある。「我、父母に背き、親戚にたに隔りぬ。此世に

て夫をも得、よすか定らん事、いつかあらん。……男の衣を手に触るこそ思かけぬ事なれ。……我縫所の襖を着ん人は誰そや、是又縁分ならずや」と、誰とも知らぬ人に、恋歌を送ることについても、痴情の気分をなからしめんと努力している。それでこそ最後の幸福も、清らかに祝福されるものになるのである。日本人らしい好みだと解すれば、一応解されるが、それだけではないであろう。中世二伝奇の「琵琶君話」は、唐の季朝威の柳毅伝と太平広記四〇五の王清とを合せて、翻案したものであるが、その評の中に、

（主人公清人が、竜王の女を不幸より助けたが、竜王から妻にせんと言われて、断る条で）末、清人が妻トスルトイハバ。一伝ノ本意ヲ失フベシ。一伝ノ本意信義ヲ安ルヲ主トスルゾ。此伝ノ柳毅伝ニ勝シハ、此一段有ルニヨツテゾ。

とある。かうした読み方が、成章の創作の場合にも働いたと見るべきである。

石点頭の玄宗と楊貴妃の間は、滑稽と思われる程に描かれている。黄番綽の詩に、寒冷の辺境の軍士の上を思う玄宗は、青年時の玄宗の英主の面影があるが、都に持返られた桃夫人の詩箋と金釵に大いに怒り、楊貴妃のとりなしで、これを許すくだりは、玄宗本は風流天子」など、言訳がましい言葉を挿入するが、余り立派なていたらくではない。たとえ夢中のこととはいえ、桃夫人をめして、貴妃に見つかり、「朕独自間遊到此、並無宮人随待、卿家莫要疑心」など言って狼敗する滑稽な様までもある。滑稽味を加えた原作者の気持は理解できても、一篇の主旨からすれば、脱線であり、かえって筋の緊密化を欠く。これ

はこの篇における玄宗の性格が定まっていなからである。儻
叟の孔雀樓筆記卷三に

吾国モ唐土モ、上手ノ作リタル書ハ、何ヨリモマツ心匠スグ
レタリ、寓言ノ書ハ一心匠都合セザレバ、コトバ巧ナル
トモ、見ルニタラズ、莊子ハイフマデモナシ、水滸伝ハ論
ズルニタラザル書ナレドモ、心匠スグレタリ。吾国ノ寓言ノ
書、予ガ見ル所ニテハ、源氏物語ヲ第一トスベシ

とあって、源氏物語の心匠のすぐれた点を指摘する。水滸伝の
心匠については、前述した評や清君錦先生水滸伝批評解（拙稿
「清田儻叟と水滸伝」―日本古典文学大系月報第二期一八一―
に少しく紹介）にその説を残している。この心匠の語をかれ
ば、石点頭の玄宗の心匠は、すぐれていないことになる。成章
は、これを後冷泉帝にかえた時、内寵盛に佳麗、朝廷に多いこ
とは、一言するが、これは小大進の如く、中宮の上臈大納言殿
に仕える下々まで、美人多かつたを言う用意として働かせて、
専ら風流にして文学に理解ある人柄を述べている。後半では、
「聡明仁恵の主上なれば、御気色ことに悪からず」で、やがて
自ら小大進をめして、玉と和歌を、氏廉の陸奥土産だ、見知っ
ているかと、一寸ひやかしたりする。中宮の小大進への同情
と共に、やがてこの奇縁を成就することを許す。一貫していかに
も風流の君主の趣を描いて舞台廻しの役目を十分にはたし
ている。この後冷泉帝の心匠はすぐれたりと言うべきである。
成章と儻叟は親友であって、その小説観にも本意・心匠など
共通のものがあがり、一は創作、一は評論に叙上の如くあらわれ
た、と見てよいが、成章と秋成の二友人の間にも、相共通するも

のあったことは、秋成の小説観（物語観）からも言い得るで
あろう（拙稿「秋成の物語観」―国文学二十三号）。近時は、
雨月、春雨をめぐる研究は、百家鳴奏、百花繚乱で、学界の慶
事と言うべきである。或人は自らの小説読法をもって、作品の
裏面に深く立入ろうとし、或人は外国に流行の新しい研究方法
を自由に応用する。或人は自己の批評態度を初めから堅持し、
或人は秋成の作家的経歴や、精神の変化を吟味して、その作品
にのぞんでいる。それぞれに面白けれども、学問的研究であ
る以上、帰一する所がなくては、困ったことである。帰一
即ち、学問的な客観的理解を求めるとは、作家が如何なる
意図を持って、作品を執筆したか。もしそれが明確にできない
ならば、時代的なその類の作品の考え方から類推して、わくを
形成することが、必要不可欠のことと考える。成章や儻叟が考
えた本意や心匠にそって、秋成の作品をも考察すれば、或は帰
一の方向を見出すのではないかと思ったりする、此頃である。